

安岡はどこから、いつ山北に来たか

平成三十年四月

寺石正路著「土佐名家系譜」に次の記載があります。

香美郡山北山南兩村、安岡氏多し天正地檢帳に多く見えず慶長以後の遷移なるべし、但地檢帳記載の分は左の如し。

(夜須) 安岡源左衛門、安岡善兵衛、安岡藤衛門。

(岸本、王子、山北、山南) 無

高知県香南市香我美町の電話帳を見ると、安岡の姓は山北に集中しています。

香我美町山北の四坊に居住の安岡はどこから、いつ山北に来たのか、家系を示す資料などから追ってみます。

先祖書・家系圖

安岡家には先祖を書いたものに先祖書と家系圖の二文書があります。この二種類の資料の生い立ちが違ってきます。

先祖書は天保時代の当主源右衛門正方が作り山北の家に伝えられました。書き出しは夜須に住んでいた源右(衛)門行正となっています。

一方、家系圖の作者は源右衛門正方の弟文助で書き出しは桓武天皇で明治三年頃まで書き足されています。この家系圖の存在は文助系列以外の安岡一族には知られていませんでした。文助は何故か作り始めた時から秘匿していたようです。一方、文助は兄が先祖書を作っていたことは知っており、「天保九戌年之先祖書」と家系圖に記載されています。家系圖は文助の末裔に明治・大正・昭和と守られ昭和の終わり頃、山北の家に貸し出されました。安岡章太郎の「流離譚」に安岡家系圖として掲載されているのはこちらの方から部分転記されています。

先祖書で源右(衛)門行正となっている人物は、家系圖では源左衛門行正(別紙参照)と違っています。単なる書き間違いではないようです。先祖書が作られる前の文政九年に本家の平八正秀が父平四郎の跡を継ぐので藩への先祖書指出には夜須の源右衛門行正が祖でその実子喜三郎が山北に入り息子武左衛門がいたと、先祖書と同じ名で書かれています。天保に先祖書を作る前に、夜須に祖がいて、その名は源右衛門行正であることが四坊の安岡一族では共有されていたのです。

夜須の安岡と家系圖

山北の安岡の祖は夜須いたのでしょうか。

夜須町史にも、前述の「土佐名家系譜」ともに安岡源左衛門が存在していたと書かれています。

家系圖に源左衛門は夜須川から一品経に移ったとあります。

文助は遠い従弟となる利弥太と天保九年に夜須へ家系圖のことで調査に行き、地檢帳に安岡源左衛門の名を見付けています。そのためか家系圖には前述の通り先祖書の源右(衛)門でなく源左衛門と記載されています。夜須に文助と一緒に現地調査に行った利弥太が天保九年に藩に指出了先祖書には、現地で見た地檢帳の源左衛門でなく安岡源右衛門となっています。前の一族提出例に倣ったのか。

文助は夜須の調査を「・・・源左衛門墓地為詮議安岡利彌太安岡文助兩人夜須村江立□一品経と云地詮議シ処不相分多分寶永四亥年之津波二流出乎ト地下役共申ム・・・」そして八幡宮舞殿の「古寄

進札有之右札二天正九年米老舛(*升)安岡源左衛門米老舛安岡善兵衛卜有是ノ善兵衛行直ハ源左衛門之第二」と書いています。

札で善兵衛の名を見付けたことが家系圖に書かれていますが(別紙参照)文章が切れています。第二は善兵衛が二男のことと想ったのですが、その名は系圖書に書かれていません。喜三郎は三郎です。三男と想定しましたが、家系圖には喜三郎を「右源左衛門實子」書き結線は惣領のように描かれています。夜須と一緒に調査に行った利弥太の家に伝わっている系図の活字化資料では善兵衛兵行直は源左衛門の弟と書かれ喜三郎は家系圖と同じく源左衛門の惣領となっています。

墓では系図は分からない

家系圖には生・没年が赤字などで書き込まれています。前述しましたが、文助は家系の調査で弥太郎と夜須に調査に行きます。調査の目的は墓の調査だったようです。墓に彫られた名前、没年などを調査しようと思ったようですが、目的の墓石はなく地元の人に津波で流されたのではないかと言われたとあります。

濱田眞尚氏(香南市文化財保護審議委員)の調査によると「現在の墓制(初期型墓標)の出現期が概ね江戸時代初期の寛永期をターニングポイントとしており、五輪塔を主とするいわゆる供養塔から劇的に変化する」とのことです。

つまり、現在のような名前など彫った墓は寛永以前にはなかったということです。文助が調査したかったのは、寛永以前の人の墓ですから、現在のような墓標を探してもなかったでしょう。寛永以前の人の没年などの情報を墓から得ることはできません。墓石だけでは家の系図を作ることはいけません。家系圖に古い人の生・没年の記載があります。文助は別の情報を持っていたようですが、そのような資料は残されていません。

敷地内の供養塔

墓石の代わりだった供養塔として五輪塔があります。高知にはこれ以外に特有の石である線刻地蔵があります。線刻地蔵は地域の寺に数多く置かれています。山北には墓地が数多くありますが、古い慰霊塔は見掛けません。米蔵の脇北西角の石垣の上に線刻地蔵・線刻観音の二体(次頁上写真)がありました。これに関連した濱田眞尚氏の調査結果を次に転記します。

*****転記始まり*****

香南市香我美町山北四坊

重要文化財安岡家住宅敷地西北裏中世石仏(通称清水様)について

1. はじめに

重要文化財安岡家住宅の古地図中、敷地西北隅に「古墓」と記載された場所(次頁下側)がある。現在、2基と類推される自然石集積が見られ、その中に各々石仏1基が存在する。この場所は、ご当主の談によると「清水様」と呼ばれていたとのことである。

この遺構の年代について、これらの遺構が設けられて以来、当初からの大幅な変遷等がないことを前提として考えると、現時点において石仏の形式から考えられる年代は中世〜近世初頭(おおむね江戸時代寛永期以前)とするのが自然である。

2. 県下の事例の概略

高知県下において、現在の墓制(初期型墓標)の出現期が概ね江戸時代初期の寛永期をターニングポイントとしており、五輪塔を主とするいわゆる供養塔から劇的に変化する。

この中世五輪塔と時期を一にして、高知県内各地で地域性の強い石仏（中世石仏）が制作される。この地域性は、概ねであるが高知県内で、東部タイプ（中芸以東）、香美郡タイプ（安芸市〜高知市東部）、中央部タイプ（高知市を中心とする東西地域）、高幡タイプ（中土佐〜窪川周辺）、西部タイプ（佐賀以西）に標準分類され、各々地域で変異タイプが存在することが近年明らかになるとともに、関西方面からの搬入品石仏も少数存在する。本事例は、香美郡タイプに分類され、2基とも各典型的図様を示す資料である。石仏のため図様がデフォルメされており、仏尊名を特定しない向きもあるが、北側の事例は剃髪像であり「地藏菩薩」と考えてよからう。南側の事例は頭部に突起があり、宝髻と考えると「観音菩薩」とも考えられるが、両手を合掌することから単に石仏として呼称することが一般的に行われている。

こうした中世期における石造物の用途については、一般的には「供養塔」と総称されるが、その造立タイミング等は未解明である。

3. 本事例のまとめ

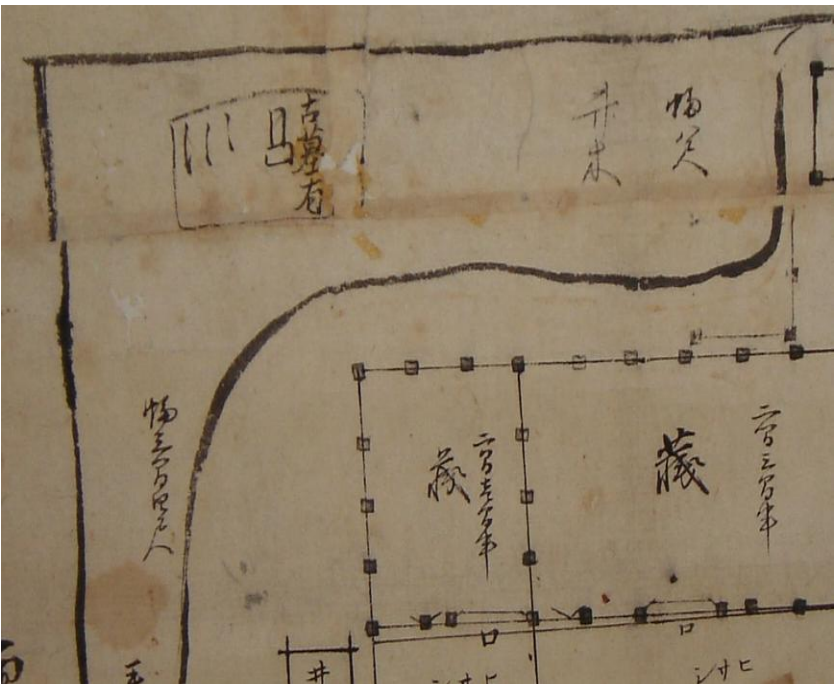
冒頭に指摘した、自然石による集積石造物（いわゆる石グロ）に石仏や五輪塔が付随する事例が、造立当初の姿を示している可能性が高く、墓標の前身形式である可能性もある。

没後間もなく埋葬を行った際、まずは石グロを埋葬場所の上部遺構として設け、何らかのタイミングで供養塔を事後（周年祭など）に追加造立したとも考えられる。つまり、中世石造物の造立の趣旨について、従前「逆修供養塔」が主流であるとされてきたが、様々なケースが想定されうるべきとの一石を投じるものである。

4. その他

安岡家は江戸時代中期から当地で繁栄したが、その来住以前からこの供養塔が存在していて、敷地造成の際に認知され、古墓として大切にしてきたものであると考えられる。

*****転記ここまで*****



米蔵が宅地の北西の角ぎりぎりまであり、今回の米蔵の試掘で北西の角の内側に斜めに横切る石垣が出てきました。そこに湧水が溜り洗い場に適した場所であり、石仏から流れ出しているようで、濱田さんの清水様と呼んだのはそのこともありました。洗い場の前の石積みの下から胴木が出て来ました。昔から湧水が涸れなかったのも木が腐らなかつたようです。

この石仏の置かれた場所は北と西側に溝に囲まれ数メートルの石垣の上です。行き来が面倒で、手入が悪くハミが出そうな場所で獣道が縦横にあります。絵図でその位置に「古墓有」と墓石らしき絵が描かれています。この絵図は高祖父の又彦の指図により作られたと推測しています。高祖父は養子ですから藩政時代の詳細は不明ですので、妻から話を聞いて書込んだのと思います。高祖母はこの石仏位置にがある人が埋葬されていることを聞いており、それで古墓と呼び書き残したのではないのでしょうか。

焼失した資料

先祖書、家系圖にも喜三郎の息子武左衛門方からの火災で文書が焼失したとの記載があります。焼失したことの記載、家系圖と先祖書で少し書き方が異なります。家系圖は赤字で源左衛門の頁の欄外(別紙参照)に書き足しています。「寛文元年先中火災ニ而舊記不殘焼失之由享保年中先祖書之有リ又天保九戌年之先祖柿ニも右断之処天保十一庚子年古皮籠反故紙之中方焼残之系圖書併ニ舊日記見出し加シ他住同姓家系且古老之申伝ヲ以改書以子孫ニ傳 翁 安岡文助正理(花押) 天保十一庚子三月吉日記」、先祖書は「但右武左ノ門方寛文年中火災仕舊記不殘後焼失其故クワシク年号且源右衛門方武左衛門迄之室生出相分不□源右ノ門方以前少モ相分不□候」とあります。

この二つの焼失した資料の扱いを読むと、家系圖では文助が色々資料を見付けたように読めますが、先祖書の作者源右衛門正方は天保九年に手持ちの資料での作成を終わり、その二年後に文助がその資料を見付け書き足し直したようにも考えられます。家系圖で寛永年の火災で焼失を消して、赤字などで書き足しています。焼け残り、古紙(反故紙)を詳細に調べたのかも知れません。

家系圖に喜三郎の生年・没年「永禄十二己巳年生正保元甲申年卒」、妻も「正保元申卒」と記載(頁四参照)されています。何か新たなことを見付かり書き足したようで、喜三郎の墓の場所及び息子「武左衛門の墓碑・…」も書き消されています。「山北江 移住」の後に消された墓地場所の記載があり、脇に妻の没年が記載されています。何か新たなことが分かり書き足したように見えます。そして、「寛永年中の火災・…」も消されています。何かが燃えずに残ったか、新たな書き物などが見付け、どこかを書き足したよう読めます。新たに見付けた資料は今はありません。

山北への移住

先祖書に山北に来た頃のことを次のように記載されています。

第一 安岡源右ノ門 香美郡夜須村ニ住居

右源右衛門安喜備後守滅亡後以後元親公江奉仕

知行三拾石拝領仕以其後

大通院様御入國以後浪人ニ而罷在候

第二 喜三郎 同郡山北村江住仕百姓業仕

文助の書いた家系圖には源左衛門は夜須川の落城で一品経(場所不明)に移住、その後夜須村の地三拾石を拝領、長宗我部滅亡後浪人と先祖書と同じことが書かれています。喜三郎の項に「右源左衛門實子寛永年中香我美郡山北村江移住」とあります。

山北へ移住したのは先祖書、家系圖いずれも喜三郎となっています。移住は家系圖に寛永年中とありますが、生まれが永禄十二年とあるので五十五歳以降に移り住んだことなり少し遅いようです。喜三郎妻について「同姓行直女」とあります。行直が前述の札にあった「善兵衛行直」とすれば、叔父の娘を妻としています。前述の通り喜三郎は惣領ですので夜須の家を出る必要はないように思います。何故、山北に移り住んだのでしょうか。いずれの資料にも、惣領である喜三郎が山北に移った理由が書かれていません。

吉良川の安岡

家系圖には夜須に来る前は安岡は吉良川にいたと記載されています。山北在住の同姓の方の家系圖を見せて頂きました。そこにも吉良川にいたような記載があります。

吉良川に安岡祖が来てから八百年として昭和五十七年に発行された「開基八百年記念誌」に掲載されている奈半利安岡家の系図、芸西村文化財調査委員長 門脇謙久編集の「安岡家古文書 安岡和藏重房 蔵持」に書かれた和食の安岡の家譜を参考にすると、両家は共に吉良川の安岡からの出ていることが判明しました。安喜軍(國虎)と長宗我部の戦のころ吉良川にいた安岡は安着側に組しました。文禄十二年に長宗我部に敗れ誅殺は免れ土地を拝領して移り住み、その三十年後の慶長五年の豊臣と徳川との戦いで豊臣側の長宗我部が追い出され山内が入国し、長宗我部の一領具足狩りでの生活がまたも変えられていました。

我家の安岡家系圖をその観点を持って読み直す(別紙参照)と、夜須川の落城とあるのは永禄十二年の安喜軍と長宗我部軍の戦いの敗戦結果ではないか、喜三郎の山北への移住も同じように一領具足狩の追跡を逃れるためと考えられます。喜三郎の父源左衛門は文禄五庚子年卒とありますが、元号の文禄五年と六十干支の庚子が合いません。連続性のある庚子を信用すると慶長五年となります。源左衛門は長宗我部の士として山内に征誅。卒年が慶長五年と伝えられ、脇に十一月廿一日卒とありこれは一豊が土佐国主に封ぜられた十一月とも合います。この安岡源左衛門卒年月日の記載後に何か新たな情報が入って書き足したようです。本文には別資料からの引用として「安岡源左衛門香我美郡の内夜須村ニ而知行三拾石拝領仕居以由長宗我部滅亡後浪人仕罷在候由」と山内入国後も生存していたような書き込みがあり矛盾しますので、卒年月日は後からの書き足しでしょう。

我家の山北の祖喜三郎は家の存続のため惣領であったが、慶長五年に山北に移ったのでしよう。現在、山北は地形的に開けてるように見えますが、北、東に山、西は物部川、南に香宗川に囲まれた隠れ郷で、後の規重の塾居の地でもあり隔絶された場所と考えられていたと思います。

その後、山北に住み郷土屈の先祖書を藩へ指出す際、夜須に居た祖を源左衛門でなく源右衛門としその略歴に「一 安喜備後守滅亡後元親公江奉仕・一 大通様入國以後浪人ニ而罷在候」とあります。略歴には当然、山内と戦闘したこと記載はなく、名を変えてたのは戦ったことを隠すためではないかと推論しました。

喜三郎の山北での生活

現在の安岡家住宅の位置に移り住んだのは覺兵衛正元とされています。系圖書では「**明和八年辛卯五月四日** 四坊池ノ上江別住・・」とあり、別住の日付まで書かれているのは何に基づくのか気になります。一方、先祖書では「右覺兵衛**父平八二付添**山北村ノ内四坊江別宅改實兄平八ノ養育ニ而相口以且覺兵衛後男子早世・・」とあり年月日はなく「父平八二付添」が何を意味するのか。覺兵衛正元は明和八年以前にも一人住まいをしたとの記録もあります。移り住んだ場所が現在の安岡

住宅と同じ広さ八百坪であり住居の税も高かったでしょう。その土地は南側に昭和中期まで生き延びた松がありましたので、敷地の前(南)側の土地の高さは現在と変化は少なく、敷地の北から西側は高く、中央部は窪地で埋め立てたと試掘結果から聞いています。解体時に北側から主屋付近に水が流れ込み湿地帯のようでした。家の北、西側は少し高くそちら地の方が良いかと思いますが、湿地で立地条件が悪いが湧き水の便を優先して、ここへ住んだのは喜三郎と考えます。喜三郎は夜須から移り夫婦一家はここで生活を開始した。北西の斜面を削り中央の湿地を埋め、湧き水付近に胴木(下写真)を置き石を積み、そこから出る湧き水を利用した。角を囲うように石垣を築いた。現在の米蔵の整地面の下の整地面に意味は不明ですが瓦花(自分が命名 下左写真)を作り、付近にカマドのような火の跡もあり、湧き水の脇をハシリ(料理場)とし喜三郎夫婦一家が生活を営んだ。

夫婦は正保元年に亡くなったと家系圖にあります。正保元年は墓制が変わる寛永との代り目です、現在の米蔵石垣の上の北西の角に埋葬された喜三郎夫婦、その後供養塔として、前述の線刻地蔵、観音が置かれたと考えます。

喜三郎は息子の名は武左衛門、下の左衛門は父の源左衛門の左衛門から採り、その父について息子に話したでしょう。武左衛門は先祖書では山北の安弘に住居、その息子が岡芝に移ったとあります。家系圖では武左衛門の墓は岡芝があるとの記載のみで住居の場所の記載がありません。先祖書と家系圖で共に没年が「元禄九年壬子歳三月十七日」と記載され、岡芝の墓地の奥にこの没年月日が刻まれた墓がありますが、その墓の人の名は削れている箇所もあり不明です。

武左衛門は何故、父喜三郎が移り住んだ場所(四坊)に住み続けなかったのでしょうか。喜三郎が亡くなった後も、武左衛門は住み続けたが、火災を起こし安弘か岡芝へ移った。安岡住宅跡の試掘からは火事の痕跡はないとのことですのでこれは私の想像ですが、窪地で湿地帯で火事発生で縁起も良くないので、他の人が住むこともなく覺兵衛正元が住む明和時代まで空地として残ったと思います。

前述の石仏二基(線刻地蔵、線刻観音)は喜三郎夫婦の慰霊碑であり、この石仏は現在工事中の米蔵の足場から間近に見えます。米蔵は部材の痕跡から、現在位置に東側から移築・拡張したことが確認されています。その移築工事でも同様な足場を作り仕事をした職人から石仏のことを聞かれ祖先の施主は先祖書に記載している喜三郎との関連の話し、それが



廣助から息子源右衛門、恒之進・房へと伝えられ、明治に高祖父又彦が前前傾の家の絵図に古墓有と書き残したのでしょうか。

両安岡のじや

家系図を見せて頂いた安岡と我家の両安岡は永禄十二年の安喜と長宗我部の戦い、慶長五年の豊臣と徳川の戦い後の山内入国で生活が大きく変わっていきました。

一方の安岡の一族は永禄十二年に和食(現在芸西村)の馬上、久礼(禮)田(現在の南国市北部)に移住しています。文化七年座敷部の建築に関わった和食の西分村の大工がいました。何故、山北から山越えの和食の大工を呼び寄せたか不思議です。馬上村の庄屋楠目と文政・天保に取引があった記録があります。文化の前半でも馬上村の安岡と山北村の安岡の付き合いがあれば西分村に腕の良い大工がいることを知り仕事を依頼したことも考えられます。

久礼(禮)田に移り住んだ安岡は「土佐名家系譜」にも記載されています。そこには長門守とありますが。名は盛高と見せて頂いた家系図に書かれています。盛高とその妻、その母(夫は前述の馬上移住させられています)の墓が山北にあります。こちらは慶長五年の征伐で久礼田から山北に逃げて来たのだと思います。

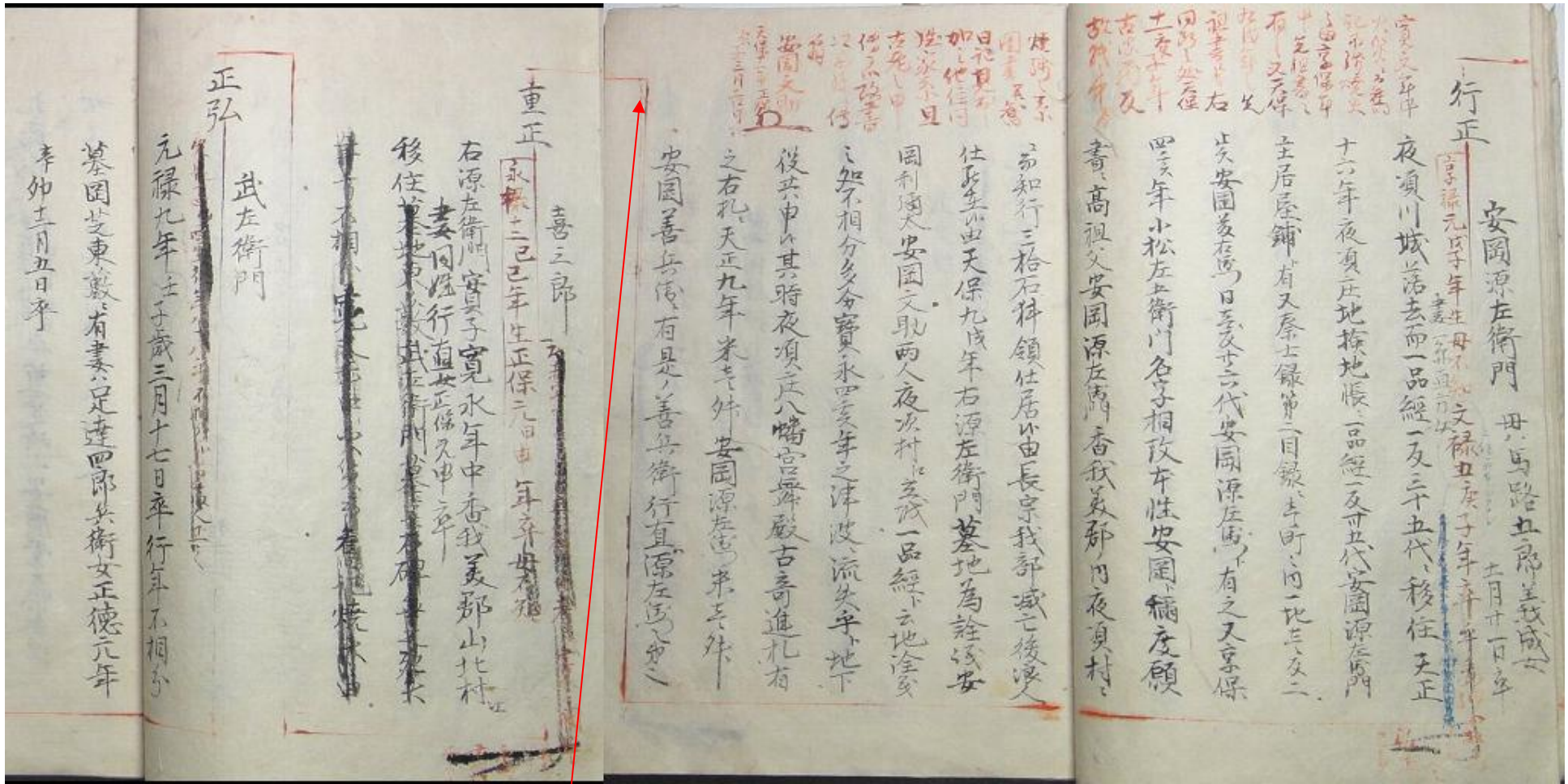
これらの安岡の山北への移住時期は「土佐名家系譜」にある「香美郡山北山南兩村、安岡氏多し天正地検帳に多く見えず慶長以後の遷移なるべし」とも合致します。

盛高は物部川を渡り、隠れ郷の山北に住む。それで盛高と妻、重義妻の墓が山北にあるのです。墓標は盛高・同妻が一基(下写真左端)、重義妻が一基(下写真中央)、その隣に将棋型墓石で戒名と川井■衛・元禄四年と刻まれた墓(下写真右端)があります。盛高と母の墓には没年が刻まれています。馬上村に移った盛高の父重義は慶長五年で喜寿、すると妻は古希、息子盛高は還暦近くで、寛永年間を越えたとは考えられません。亡くなった時期が寛永以前とすると前述の濱田眞尚氏の見解から埋葬場所に個別の墓標はなく、我家に残されたように石グロ、石仏などとなります。墓標は後日、慰霊の思いを込めて建てたのでしょうか。建てたのは、参考にした家系図を残した人と推測します。少し違いますが、慰霊または記憶を留めるための埋葬骨なしの墓標が我家の四坊山墓地にもあり、恒之進、嘉助、覚之助の墓がそれです。

また、芸西村文化財調査委員長 門脇謙久編集の「安岡家古文書 安岡和藏重房 蔵持」によると和食の馬上に移住した安岡の子孫に海援隊に参加した安岡金馬がいるそうです。金馬は明治に海軍機関学校の教授となり横須賀に住居しました。横須賀で晩年を過ごした龍馬の妻お龍と親交があったようです。どんな話をしたのでしょうか、想像が膨らみます



以上



行正

安岡源左衛門

母馬路五郎美我成

十一月廿一日卒

文祿五庚子年卒

夜須川城落去一品經一及二十五代移住天正

十六年夜須庄地換地帳一品經一及二十五代安岡源左衛門

主居屋鋪有又奈士録第二目錄寺町内二地三及二

止安岡美在馬日及十三代安岡源左衛門有之又京保

四年小松左衛門名字相改本姓安岡稱度願

書高祖父安岡源左衛門香我美郡日夜須村

加知行三格石科領仕居由長宗我部滅亡後邊

仕長宗由天保九戌年右源左衛門墓地為詮該安

岡利源父安岡文助兩人夜次村立成一品經下云地陰交

之不相分多分寶永四亥年之津波流失乎地下

後共申其時夜須庄八幡宮舞殿古奇進札有

之右札天正九年米寺外安岡源左衛門米寺外

安岡善兵衛有是善兵衛行直源左衛門

重正

喜三郎

永祿十二己巳年生正保元甲申年卒母不知

右源左衛門實子寬永年中香我美郡山北村

妻同姓行直女正保元申卒移住墓地東藏武左衛門墓石碑之

共卒不相分寬文年中火災二而舊燒失由

正弘

武左衛門

元祿九年壬子歲三月十七日卒行年不相分

墓園芝東敷有妻足達四郎兵衛女正徳元年

卒卯二月五日卒

上の赤い線は源左衛門と喜三郎が結ばれ。喜三郎が惣領であることを示している。「・・・善兵衛行直源左衛門第二」と文章が途切れている。
 *喜三郎以降の記載は次の通り
 喜三郎(*取消線で解読不可)/重正/(赤字)永祿十二己巳年生正保元甲申年卒母不知/右源左衛門實子寬永年中香我美郡山北江/妻同姓行直女正保元申卒/移住墓地東藏武左衛門墓石碑之共/卒不相分寬文年中火災二而舊燒失由

- 十一月廿一日卒
- ↑文祿五庚子年卒
- ↑夜須川城落去一品經
- ↑安岡源左衛門
- ・ 押領長宗我部滅亡後浪人仕罷在候由